

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：34523

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12555

研究課題名(和文) 細幅織帯の紋様にみられる文化的背景とその技術伝承の実践解明

研究課題名(英文) Practical elucidation of the cultural background and technical tradition seen in narrow woven patterns

研究代表者

曾和 英子(SOWA, Eiko)

神戸芸術工科大学・附置研究所・研究員

研究者番号：80537134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、細幅織物に焦点を合わせ、民族の信仰文化や製織技術、織り具の3つの視点から紋織帯の文化を体系化し、その現代的価値を探った。ブータンから中国、台湾、沖縄に至るアジア各地に点在する生活文化を俯瞰することで、発展と衰退の過程でそれぞれの地域で異なる形で残された文化と技術を統合し、以下のようにまとめることができた。

1) 諸民族に共通する帯の文化発達の背景として、古代照葉樹林文化圏に発達した蛇信仰が浮かび上がった。  
2) 経系の並べ方と織組織の変化により、経紋織の技術を整理することができた。3) 織具は、経系のテンションをコントロールする方法から大きく膝機と腰機、テーブル機に分類することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

緯紋織の技術の発達と普及により、織物の学術界では緯系により紋様を織りなす技法に着目した研究が主流となった。しかし、経紋織はアジアの基層文化に深く根づいている生活文化である。本研究は、これまでにあまり注目されてこなかった経紋織の技術を取り上げることで、紋様織りの技法における空白を埋める役割を果たした。なお、経系という視点から民族の生活文化を見直したことは、織物を通してアジアの文化を解釈するための、独自のアプローチ方を提起することとなった。

本研究は、伝統技術を文化や道具と結びつけて体系化することにより、その持続可能な発展に向けた新たな試みとして重要な意味があると思われる。

研究成果の概要(英文)：Focusing on narrow fabrics, this study summarizes the cultural system of the patterned weaving belt and explores its contemporary value from three perspectives: ethnic belief culture, weaving techniques, and weaving tools. By examining the weaving cultures transmitted throughout Asia - from Bhutan to China, Taiwan, and Japan - we integrated the cultures and techniques that have persisted in various forms in each region through the period of development and decline.

1) The development of the belt culture common to these regions is influenced by snake beliefs that emerged in the evergreen forest cultural sphere. 2) Warp pattern weaving techniques can be classified according to the warp yarn arrangement and weave structure.

3) Weaving tools are classified into knee looms, backstrap looms, and table looms based on the method of controlling warp tension.

研究分野：アジア織物文化

キーワード：細幅織物 経紋織 手織機 蛇信仰 沖縄 ブータン 台湾 ミャオ族

## 1. 研究開始当初の背景

細幅織帯は、古代から生活に欠かせない日用品として世界各地で活用されている。同時に、民族の信仰物として、その織り紋様も古代先民の自然に対する畏敬の念や「祈り」、神話故事などを表現し、民族の基層文化を伝えてきた。その紋様織には古くから経紋織りが発達し、中国の漢において最盛期を迎えた。しかし、経紋織はその色彩表現の制限や織り技術の複雑さにより、幅広織物においてはほとんど見られなくなった。また、経紋織の中でも特に複雑な技術とされる経錦織は、唐の時代に衰退してしまった。細幅織帯は織幅が狭いためその織具はシンプルであり、原始的な体機や帯織りに特化した簡易機が、現在に受け継がれている。また、幅広の織物ではほとんど衰退してしまっただけでなく、織帯においてはいまだに活かされている。帯に伝承される経紋織り技術を体系化することは、人類の織りの基層文化を探るために大変意味のあるアプローチである。

しかし、その簡易さから先人の大切な工芸遺産として重要視されず、あまり広く知られることも、詳細に記録されることもされてこなかった。帯に関連した信仰文化が薄れたこと、そして文字による技術の体系的な記録が欠如していることから、帯の文化は衰退しつつあり、手織り技術の伝承が危ぶまれている。紋様織帯の文化を体系化し継承することは、手織り文化の持続的な発展に関わる切実な問題であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、織帯に焦点を合わせ、紋様の象徴性と構成美、紋様表現と関連して発達した製織技術と織り具の3つの視点から、紋織帯の文化を体系化し、その現代的価値を見直し、その文化を伝えるための教材と教育プログラムを提示し、持続的発展の可能性を模索することを目的とした。帯の紋織り文化を体系化するために、多分野の研究者と連携を取りながら、文化継承について多角的な議論を展開した。

## 3. 研究の方法

本研究は、帯織りの技術だけではなく、織具、民族の信仰文化など学際的視点に基づいた調査分析を行った。なお、調査範囲をブータンから中国の西南部のミャオ族、シェー族の地域、台湾のタイヤル族地域日本の沖縄までの広範囲に広げることにより、各地に分散して継承されている文化や技術を、グローバルな視点で概観し、一つの地域では欠落していた部分を補いながら体系化を図った。

## 4. 研究成果

### 1) 帯の文化

#### (1) 女性から意中の男性に贈る

沖縄の伊波メンサーは、沖縄のうるま市石川伊波に伝わる細幅の木綿織物である。伊波メンサー織は、数百年前の琉球王国時代に南方貿易で伝わった技術で、かつて女性が意中の男性への贈り物として作ったと言われている。

中国のミャオ族も女性が男性に花帯を贈る風習があり、以下のような伝説が伝わっている。

昔、あるミャオ族の村に美しい少女のルナがいたが、妖怪の魔法で毒花蛇にされてしまった。ルナに思いを寄せていた青年が、ルナを助けようと戦った末に死亡した。無事救われたルナは、助けてくれた青年への思いを込めて、花蛇を真似た美しい花帯を織り、腰に付けて離さなかった。それを見た他の少女らも心を打たれ、ルナに花帯の織り方を学び、好きな男性に花帯を贈って愛情の印とした。

広範な地域でその文化現象を捉えると、女性から男性へ贈られる帯は蛇の象徴ではないかと推定される。

#### (2) 祖先への供養

中国苗嶺山区のミャオ族には極めて古い原始文化や習俗が受け継がれており、牯臟節という祖先を祀る伝統的な祭りでは、蛇の背文様を織り込んだ花帯を供えている。ここは古代猛毒の蛇を崇拝する巴国が支配していた地域であり、ミャオ族の花帯は古代巴人との歴史的な繋がりを伝える象徴的なものであると考えられる。

#### (3) 魔除けの紐

ブータンで民族衣装を着用する時に締める帯をケラ（ケ＝腰、ラ＝布）と呼ぶ。男性のケラはチベット由来の虹の模様を織り出した帯であるが、この男性のケラは大変特別視され、またいざり無造作に置いたりしないよう、小さい頃からしつけられる。また、ブータンのお坊さんの靴の紐は使い古したら、民間で魔除けとして求められ、住居の入り口のドアの上に納められるという。

このように、紐や帯が特別に思われているのは、ブータンに古くから伝わる蛇信仰に関係あるのではと考える。仏教がチベットからブータンに伝わる前に、蛇はブータンの土着神の王として信仰されていた。蛇と同じく細長い織物は蛇の象徴として、強い魔除けの効果が期待されているのではないかと推測する。

以上の分析から、沖縄、中国ミャオ族、ブータンの帯は、かつてアジア諸地域に存在した蛇信仰の名残として、帯の民俗的な風習を形成し、今に伝わってきたのではないかと思う。

## 2) 経浮織の技法

紋織りは、経浮で紋様を表現する方法と緯浮で紋様を表現する方法がある。古代中国で発達した経錦は経浮で紋様を織り出したもので、日本には蜀江錦という名で法隆寺に伝世したのがある。経浮織は、色彩表現に制限があり、製織に高度な技術が必要とするため唐代以降に衰退し、それ以降は緯浮織が主流となった。現在、沖縄・読谷山の花織や博多帯、インドネシア・スンバ島の Pahikeng などに見られるものの、経浮織の織物は稀な存在となっている。経浮織技法の共通した特徴として、以下の点が挙げられる。

- ・経糸には地糸と紋糸があり、紋糸の浮きにより紋様が表される。
- ・紋糸に地糸より太い糸を使うことで、紋様の立体感を強調する場合がある。
- ・経糸を密に並べて織るため、表面には経糸のみが現れ、緯糸は現れない。
- ・緯糸に太い糸を用いることで、紋様の浮きがよりはっきりと現れる。
- ・緯糸を強く打ち込み、張りのある硬めの紐を織り出す。

経浮織は、地域によって経糸の並べ方に違いが見られ、紋様表現にもそれぞれの特徴が見られる。本研究では、以下の種類を確認することができた。

### (1) AB 配列・平織

沖縄、台湾、中国ミャオ族の織物で確認された配列であり、2組 (A 色と B 色) の経糸が、1 本間隔で ABAB の順に並ぶ。つまり奇数列の経糸が A 色の場合、偶数列の経糸は B 色となり、平織の部分には、A 色と B 色の横筋が交互に現れる。その中の 1 組の経糸を用いて浮き模様を織り出すのである。浮きの長さは主に 3 となっている。

縞模様の地に模様を織り出すので、模様をはっきりと表すためには、明度の対比が大きい 2 色の経糸を用いることが多い。竹富民芸館蔵のメンサーは、隣接した 3～5 本の紋経糸を浮き織りすることで、紋様をよりはっきりと表している。紋様の縦の長さは、緯糸の太さと密度で変化させることができる。

### (2) AB 配列・斜文織

ABAB 配列の斜文織には、平織のような縞の地紋様がなく、紋様をはっきりと表現される。経浮き糸はすべて 2 本の緯糸を飛び越えた長さで現れ、その密度は緯糸の密度の 3 倍となる。例えば、写真のサンプルは、経糸の密度が 15 本/cm で、緯糸の密度は 5 本/cm である。このように経糸の密度が高くなると、緯糸は表面からほとんど見られない。紋様を作るために表に揃い出された経浮糸の裏に隙間ができるので、裏面からは緯糸が点々と現れる。

### (3) ABABBABA 配列・平織

地機は一般的に綜統棒が 2 本だけとなっている。経糸を ABAB 順に 1 : 1 で配列し続けると、同じ色の経糸が同じ綜統棒に配置されることになる。平織の場合、地に縞紋様が現れ、表に揃い上げた経浮の裏面には、隙間が現れる。この織物 (タイヤル族南澳群) は、ABABBABA の配列方式を採用し、地経を 2 本の綜統棒に配分させている。このような経糸の配列方式は大変稀な事例となる。

### (4) ABA 配列・平織

ABA の配列による経紋織は、中国ミャオ族やシェー族、台湾のセデック族に多く見られる。中国ミャオ族とシェー族の花帯は、経糸を ABA 順に並べて織り上げている。地経 A に細糸を、紋経 B に 3 倍ほど太い糸を用いることで、紋様を立体的に浮き上がらせる。地経の数が紋経の 2 倍となるので、織り地は大変丈夫でしっかりしている。

台湾のセデック族の代表的な織物に「米粒織」がある。写真の織物は赤糸 A と黒糸 B を ABA の配列で並べて織り上げたもので、模様が米粒のような小さな点で構成されていることから「米粒織」と呼ばれる。2 組の経糸の中で、赤糸が黒糸より太く、黒糸の 2 倍の数を占めるため、織物の表面はほとんど赤糸で覆われ、黒糸は点として現れるのである。

米粒織の織物は、表面がほとんど単色に見えるので、他の多色織りの織物に比べて地味な印象となるが、1 単位の紋様に必要な経緯糸が交差する点は、タイヤル族の他の紋様織りに比べて格段に多い。さらに、変化模様を連続させたものもあり、大変複雑な技術である。

米粒織りには一定の規則があり、その紋様分析図から見ると、横方向の偶数列に見られる点の位置が4列毎に繰り返し現れている。例えば、6列目と10列目の点の位置は2列目と同じで、4列目と8列目の点の位置は12列目と同じである。赤糸の浮きの長さもほとんど3となっており、多くて5である。米粒織は、先に紋様のデザイン規則を把握しておかないと綜統の設定ができないので、大変熟練が求められる。

### (5) ABABA 配列・平織

台湾タイヤル族の織物には ABABA 5本1組の配列による平織のものが多く見られる。ABA 配列と同様に、地経の A と紋経の B が2つの綜統に分散される。同じ太さの糸を用いた場合、ABABA 5本1組の配列で織り出した紋様は、ABA 3本1組の配列で織り出した織物より、紋様の幅が大きく、浮糸の長さも比較的長い。

## 3) 織りの道具

織幅の狭い帯は、綜統（多くは単綜統）、刀杼（刀状の緯打具）、中筒（開口保持棒）の三つの機構さえ揃えば、製織可能である。歴史的には、①原始的な体機、②帯織り専用の簡易機、③着尺織りも可能な地機（天秤腰機）、④高機などの織具が使われてきた。ここでは、本研究の調査により確認された各地の帯織機を以下のように整理する。

### (1) 榕江ミャオ族の膝機

榕江ミャオ族は膝を織台にし、膝の力で経糸のテンションを調整する膝織り（ひざおり）を今に継承している。織りに必要な道具は極めてシンプルで、A) 刀杼（牛骨製または竹製）、B) 糸綜統、C) 中板のみである。刀杼は、高排村の場合は牛骨製を使っていたが、周辺村の水族、トン族は竹製を使っていた。

シンプルな構造であるため、運びやすくどこでも織れる利点がある。腰機の場合は、経糸の片端を固定するための柱となるものが必要となるが、膝織りはそのような柱さえ必要なく、室内で椅子を並べて丸くなって話しをしながら織ることが多く、畑仕事の合間に織ることもあるという。

膝織りの難点は、膝に経糸を掛けて織るため、広幅の織物ができないことである。榕江ミャオ族の花帯は3-5 cmと決まっており、これは紐織りに特化した技術だと言える。

### (2) 湘西ミャオ族の膝型簡易織機

中国湖南省の湘西ミャオ族は、膝型の折りたたみ式織機を用いて花帯を織る。A) 膝型の織台、B) 中板、C) 糸綜統、D) 刀杼で構成された原始的な簡易機である。

龍玉門は、湖南省政府により非物質遺産伝承人として認定された唯一の花帯の織り手である。龍さんが織る花帯は、様々な色糸を織り込んだ「彩帯」が主流で、織幅も約1cmの細幅のものから10-13cmの比較的広い幅のものまでさまざまである。織台を用いることで、織幅が多様になったと思われる。

なお、紋様織りの工夫も見られる。①花綜統の設置：花帯の綜統は一般的に単綜統であるが、龍さんは上下に花綜統を設置している。下糸にはすでに綜統が設置されているので、その綜統の中から紋糸に設けられた綜統のみを分けて束ねておく。上糸の紋糸にも花綜統を設け、下から引っ張って使う。②竹串の活用：紋糸と他の経糸との間には竹串を差し込み、紋糸をすくいやすくしている。

### (3) 沖縄伊波メンサーのイザリ機

伊波メンサー織の製織は、他の地域のイザリ織りと同様に、花綜統を設けず、手動で紋糸をすくい上げる。ただ、経糸をすくい上げる方法として、薄い竹串を2本用いることが特徴であり、地元では「ゲーシ織」と呼ばれている。2本の竹串の使い方は、以下のようになる。

- ・中筒開口時に中筒によって上方に位置する白色の上糸から、1本目の竹串で紋糸をすくい上げ、竹串を差し込んだまま刀杼で開口を広め、緯糸を通す動作をする。
- ・差し込んだ1本目の竹串は抜き取らず、手前に引き寄せておく。
- ・綜統を上げ綜統開口を行い、下糸が上方に位置するようにする。
- ・手前に引き寄せておいた竹串を先端方向、つまり綜統方向に移動させると、竹串によって選ばれた上糸が下糸の上に浮き上がってくる。
- ・綜統と竹串によって開口した部分に緯糸を挿入する。
- ・竹串をそのままにして、中筒開口を行う。
- ・1本目の竹串は抜き取らず、次の紋糸をすくう際のガイドとして利用し、2本目の竹串を使って次の紋糸を選び出す。
- ・紋糸をすくい終わると、1本目の竹串を抜き取り、2本目の竹串は差し込んだまま、刀杼で

開口を広め、緯糸を通す動作をする。

このように、紋織で竹串を2本使い、その中の1本をガイドとする織り方は、知り得る限り他では見られない。柳は、ラオスやイラン、ウズベキスタンなどで、同様の浮き織り組織を調査してきたが、いずれも綜統の手前側で串状の開口補助具を使用する例は一般的であるが、もう1本をガイドとして使う例は伊波メンサーだけだったと報告している。

#### (4) ブータンの地機

ブータンの伝統的な手織機は、「タシン」(タ=機、シン=木)と呼ばれる地機である。輪状に整経した経糸に3本の棒を通し、1本の棒を腰ベルトに結びつけ、残りの2本は地機の縦柱の穴に渡す。二つの穴の高さが異なるため、経糸は横から見ると3角形を成し、織り面が斜めになる。織るときに目の前に経糸が斜めにあるので、模様が見やすく緯打ちの力が入りやすい。

タシンにセットする経糸は、輪状整経または擬似輪状整経される。横幅は15 cmほどの細幅の帯から50 cmほどの衣服用の織物までとなる。現在は、女性の衣服は無地に片面縫い取りの技法で複雑で細かい紋様が織り込まれたものが多く、経浮織はゴーと呼ばれる男性の長衣に伝わっている。ゴーの経浮紋様を織る時には、紋様ごとに紋様掬いのための補助棒を設置しており、紋様が変わる際には、設置していた補助棒を全て抜き取り、改めて次の紋様のための補助棒を設置する。一般的に一つの紋様を織るために10本以上の補助棒を設置する。

#### (5) 台湾の地機

台湾の地機は、箱状の織台が特徴となる。かつては、タイヤル族の家庭に女の子が生まれると、父親が森で木を伐採し、娘が適齢になるまでには丸太の中身をくり抜いて織台を制作したという。娘は13歳ごろから正式に織りを学び、婚礼用の衣装を織り上げた。さまざまな織りの技術は、婚礼服を織ることを通して学んだ。

輪状の経糸を織台に巻きつけ、足で織台を押しながら経糸のテンションをコントロールする。緯糸を打ち込む音が織台の空洞の中で共鳴し、大きく響く。織りの技術が娘の主な生活力として評価されていた当時において、朝から織機の音を響かせるのは、その娘の勤勉さをアピールする効果を果たしたという。

織らない時、織具や織りの途中の布や糸は、すべてこの織台の中に収納することができる。経糸が絡まらないよう保護する役割もしたのであると思われる。

#### (6) 中国シェー族のテーブル機

中国のシェー族の花帯は、その紋様が古代シェー族の文字を表すとされ、古くから織り方が伝わっている。沖縄のいざり機に似た織り方が伝わっており、腰で経糸のテンションをコントロールする。ただ沖縄のいざり機織では経糸の織り面が地面に対して平行になっているのに対し、シェー族は斜めになるように取り付ける。ブータンの地機でも織り面が斜めになるようにセットしているが、それにより紋様糸の確認が容易になり、緯糸が打ち込みやすくなると思われる。

現代のシェー族は腰機の他に、テーブル機を使うこともある。織台の真ん中に中筒棒が水平面より15 cmほど高く設置されており、織り面がやや斜めになる仕組みとなっている。輪状整経された経糸を機にセットすることで、経糸から体を解放させることができたが、経糸のテンションは調節できなくなっている。シェー族の織り手によると、花帯織教室ではこのテーブル機を使っているが、やはり腰機で経糸のテンションを調節しながら織った帯の方がしっかりした仕上がりになるとのことである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|  |                   |
|--|-------------------|
| 1. 著者名<br>曾和英子                         | 4. 巻<br>17        |
| 2. 論文標題<br>ブータンのイラクサ織物の観光マーケティング展開     | 5. 発行年<br>2023年   |
| 3. 雑誌名<br>アジアデザイン文化学会論文集               | 6. 最初と最後の頁<br>1-8 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>有        |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-         |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>曾和英子                         | 4. 巻<br>第16-1巻        |
| 2. 論文標題<br>カード織の現代的継承の取り組み             | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>アジアデザイン文化学会論文集               | 6. 最初と最後の頁<br>213-226 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>曾和英子                         | 4. 巻<br>第15巻          |
| 2. 論文標題<br>沖縄のグーシ織技法の解明およびその現代的伝承      | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>アジアデザイン文化学会論文集               | 6. 最初と最後の頁<br>148-157 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>ばんばまさえ                       | 4. 巻<br>第16-1巻        |
| 2. 論文標題<br>家庭の織機で作る白紘の提案               | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>アジアデザイン文化学会論文集               | 6. 最初と最後の頁<br>183-190 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>ばんばまさえ                                      | 4. 巻<br>第16-1巻        |
| 2. 論文標題<br>日本の家庭における織物文化と織機 中村式机上織機、九重式手織機、さをり織機の比較から | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>アジアデザイン文化学会論文集                              | 6. 最初と最後の頁<br>191-202 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                        | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

#### 6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                          | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                     | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | ばんば まさえ<br><br>(BAMBA MASAE)<br><br>(00249202)     | 神戸芸術工科大学・芸術工学部・研究員<br><br><br><br>(34523) |    |
| 研究分担者 | 曾和 具之<br><br>(SOWA TOMOYUKI)<br><br>(00341016)     | 神戸芸術工科大学・芸術工学部・准教授<br><br><br><br>(34523) |    |
| 研究分担者 | 安森 弘昌<br><br>(YASUMORI HIROMASA)<br><br>(20341018) | 神戸芸術工科大学・芸術工学部・准教授<br><br><br><br>(34523) |    |

#### 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

#### 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

|         |         |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|